

無量壽

平成21年8月13日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語⑫

(林徳寺だより第十四号からの続きです。)

親鸞聖人が弘長二(一二六三)年十一月二十八日に九〇歳で亡くなられた際に、その枕元におられたのは聖人の末娘、覚信尼様でした。

覚信尼様は、聖人がまだご在世のうちに、夫、日野広綱様と死別されました。それで長男の覚恵様を、聖人が得度をされた青蓮院に預け、親鸞聖人とともに暮らしておられたのです。

聖人が亡くなられた後、覚信尼様は小野宮禪念様と再婚されました。そしてお一人の住む土地に、関東に多く在住していた親鸞聖人のお弟子から集まった寄付を元に、聖人の廟堂(お墓を覆う建物)を建立しました。

一辺が一間という大きさの六角形の建物で、廻り廊下がつき、瓦葺きだったと言われています。後にこの土地を、覚信尼様が関東などに在住す



親鸞聖人廟堂

様の子孫が門弟の了承を得て、廟堂の守護をする留守職(るすしき)に就任することになったのです。これが現在まで続く、本願寺と御門主の元と なっています。

覚信尼様のあとは長男の覚恵様、そのあとは覚恵様の長男、覚如様と留守職は継続されました。

この三代目の留守職である覚如様は、親鸞聖人が亡くなられて八年目に生まれられました。ですから聖人から直接、浄土真宗の教えをお聞きする機会はありませんでした。また二代目の覚恵様は、上の段で書いたように青蓮院で修行をされましたから、聖人の教えをそのまま受け継いではおられませんでしたが、父の覚恵様からも聖人の教えを聞くことがおできにならなかつたのです。

る聖人のお弟子に 寄付されたため、 土地・建物ともに、 聖人の廟堂は聖人のお弟子の共有となりました。そしてそれ以後、覚信尼

このままであれば、聖人の教えはそのままで残されてしまひ、ただ建物としての廟堂のみが後の世に残されることになったかもしれませぬ。ところが幸いなことに、覚如様にうってつけの師匠がおられました。それは、聖人から義絶された長男、善鸞様の長男で如信様でした。如信様は幼い頃から祖父である親鸞聖人の膝の上で、その教えをしっかりと聞いて育たれました。聖人の教えが身に染みこんでおられたと言つても良いかもしれません。

如信様は普段は関東にお住まいでしたが、毎年親鸞聖人の命日には欠かさず京都に上り、廟堂を参拝されて、覚如様に浄土真宗の教えを伝えてくださったのです。

浄土真宗ではこのような教えの流れから、宗祖親鸞聖人に続いて、二代目を如信様、三代目を覚如様



如信様

を覚如様と数えて いるので す。

(続く)

浄土真宗の作法・心得（シリーズ20）

浄土真宗の教章 秘の歩む道

平成二十年四月十五日、本山恒例の「春の法要」に引き続き行われた「親教で、御門主は「浄土真宗の教章」を述べられました。



御門主のご親教

これは、浄土真宗

本願寺派の教えの要旨であり、教えを理解するための手引きでもあります。是非御門徒の皆様にご紹介いたします。

宗名 浄土真宗

宗祖 親鸞聖人

ご誕生 一一七三年五月二十一日

(承安三年四月一日)

ご往生 一二六三年一月一六日

(弘長二年十一月二十八日)

宗派 浄土真宗本願寺派

本山 龍谷山 本願寺 (西本願寺)

本尊 阿弥陀如来 (南無阿弥陀仏)

聖典 ・ 釈迦如来が説かれた『浄土三部経』

『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』

『仏説阿弥陀経』

・ 宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』

『教行信証』行巻末の偈文

『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』

・ 中興の祖 蓮如上人のお手紙

『御文章』

教義

阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人びとを教化する。

生活

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうち、現世祈禱などにたよることなく御恩報謝の生活を送る。

宗門

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

※ わかりにくいことがありましたら、遠慮なく住職にお尋ねください。

日本語になった仏教の言葉 ⑭

《勿体》

- 「勿体ない」という言葉の中には
- 神仏をおそれるころ
- 感謝するころ
- 反省するころ

というように意味が含まれていると言います。実際この言葉を聞いてみると、そういう気持ちが表裏してきて、まことに意味深長な内容を表します。

勿体なや 祖師は紙子の九十年 句仏

この句の「勿体なや」は、「ありがたや」でも「あな尊と」でもだめなんで、祖師九十年のご苦労は、ただ、「勿体なや」の一語に尽きます。そこにこの句の名句である所以があるのでしょうか。

勿体は、仏教語の「無体」です。無体とは、一切の存在するものは、いろいろの因縁によってあるもので、それ自体として存在するものはない、ということですが、どんな小さなものでも、いろいろのおかげで、できていることを知らなければなりません。そこにもものを大切に、感謝するところが生ずるのです。ものを粗末にするのは、無体の意味を知らなからです。そこに「勿体ない」の日常語ができたのでしよう。

念仏生活の基調は、「勿体ない」のころでなければなりません。

『私たちの言葉』経合芳隆より